

吉野の花も植木なりけり

十三、劍道を何んと答へん岩間漏る

露のしづくに宿る月影

十四、打ち合す劍の下に迷ひなく

身を捨てゝこそ生きる道あれ

十五、敵をたゞ打つと思ふな身を守れ

おのづからもる賤が家の月

十六、武士の心の内に死の一つ

忘れざりせば不覺あらしな

十七、残心は勝て兜の緒をしめて

敵の根城を奪ひとるまで

十八、太刀佩くは何のためそも天皇の

勅のさまを畏まんだの

十九、敵あらばいで物見せむほこ先を

彌生半ばのねむりざましに

二十、武夫の道し備へてあるならば

なに恐るべき外國の船

二十一、龍田川流れに浮ぶ紅葉は

散らねばいかで人のめづべき

二十二、君が爲わが取り來つる梓弓

本の都にかへさざらめや

二十三、武士の上矢の鏑一筋に

思ふ心は神ぞ知るらむ

二十四、千萬の仇に向ひて走り猪の



かへり見せぬを心ともがな

二十五、武士の弓矢取る名の高見山

なほ幾度も越えむとぞ思ふ

二十六、百敷ひゃくしきや照る日の前にとる矛の

たつる心は神もしるらむ

二十七、武士の手毎にもたるくはし矛

ちたるの國ぞ猛き國なる

二十八、骸かばねをば岩屋のこけに埋みてぞ

雲井の空に名を留むべき

二十九、命をも輕きになして武士の

道より重き道あらめやは

三十、我が君の命にかはる玉の緒を

何いとひけむ武士の道

三十一、世の人に劣らじと思ふ一筋は

老もへだてぬ武士の道

三十二、大日本神代おほやまとゆかけて傳へつる

をしき道ぞたゆみあらずな

三十三、薙刀のながくわすれず國の爲め

君の御ためと思ふ心は

三十四、劔太刀いよとぐべしいにしへゆ

さやけく負ひて來にしその名ぞ

三十五、人みな心の心に似たる劔太刀

みがけばこそはするどかりけれ

三十六、惡念の起る處を切り拂ふ



これが寶の劍なりけり

三十七、思ひきる心の中に劍だに

あらば浮世のつなものは

三十八、思ひなく巧みもあらぬ夢想には

虎さへ爪の置き所なし

三十九、乾坤を其儘庭に見る時は

我は天地の外にこそ住め

四十、劍太刀もろ刃のときを足にふみ

死にも死になむ君によりては

四十一、坐禪して工夫もなさず床の上に

只いたづらに夜を明すかな

四十二、振りかざす太刀の下こそ地獄なれ

一と足すゝめ先は極樂

四十三、稽古をば疑ほどに工夫せよ

解とたるあとが悟なりけり

四十四、うかくと吟味もなくて習ふをば

何を相手に教ふべきかは

四十五、不器用も器用もともに實有りて

功がつもれば道を知るべし

四十六、世は廣し事はつきせじさりとは

我が知るばかり有りと思ふな

四十七、武士の學び覚えし劍の道

死に至るまで怠るはなし

四十八、浦風や浪の荒磯の月かげは



四十九、吾とわが心の月を曇らして  
數多に見えてはげしかりけり

五十、善きも友悪きも友の鏡なる  
餘所の光を求めぬるかな

五十一、よしあしと思ふ心を打捨て、  
見るに心の月をみかけば

五十二、折得ても心ゆるすな山櫻  
何事もなき身となりて見よ

五十三、おのづから映れば映る映るとは  
誘ふ嵐にちりもこそすれ

五十四、いづくにも心留らば棲みかへよ  
月も思はず水も思はず

五十五、わざにこそ理は有明と知りぬべし  
ながらへば又元の故郷ふるさと

五十六、武士の夜の道にはともし火を  
障子明ければ月はさすなり

五十七、武士の學ぶ教は押しなべて  
中に持たせてはしを行くべし

五十八、武士の心の鏡くもらすば  
その極めには死の一つなり

五十九、學びぬる心にわざの迷ひてや  
立あふ敵うつし知るべし

六十、ふしおがむいがきのうちの水なれば  
わざの心のまた迷ふらむ



心の月の澄めばうつるも

六十一、打つ人も打たるゝ人も打太刀も

心なとめて無念無心ぞ

六十二、根をしめて風にまかする柳見よ

なびく枝には雪折れもなし

六十三、降ると見ばつもらぬ内に拂へかし

雪には折れぬ青柳の枝

六十四、よしあしのうつる心の水鏡

よくく見れば我姿なり

六十五、臍の底で一度死だ男には

真田さなだの槍もはも立たぬなり

六十六、雨霰雪や氷とへだつれど

とくれば同じ谷川の水

六十七、命をばかろきになして武士の

道より重き道あらめやは

六十八、氣は長く心は丸く腹立たず

己小さく人は大きく

六十九、投げやりにする故さびも出づるなり

磨き直せば通る一心

七十、極意とは己が睫まぶたの如くにて

近くあれども見つけざりけり

七十一、すきと巧上手と三つをくらぶれば

すきこそ物の上手なりけれ

七十二、深山みやまにも開くや花の頃あらん



春の心のよし遅くとも

七十三、身は軽く心静かに迷はずば

敵の勝氣のうちに勝あり

七十四、立合は心静かに氣をくばり

富士の姿を姿とはせよ

七十五、立向ふ時の心は明月の

くまなく照る姿なりけり

七十六、いろくいと構はあれど正晴の

外に心をうつすべからず

七十七、打つ時は雨のおちゆ拵くすしゆび

小指の三つでしぼる心地で

七十八、執る太刀の握り調子は柔かに

しめすゆるめす小指はなさず

七十九、劍太刀死物なれど手に取れば

鬼神も避くるものとなりけり

八十、打つ太刀は一技二腕三氣合

四腹五心の法をこそ知れ

八十一、打込はふりにかまはず數を打て

いつかは馴れて早業となる

八十二、打つ箇處の定めはあれど定まりぬ

己が心の迷ひそめては

八十三、打つて来る太刀をたちにて受けずして

體をかはしてさけならふべし

八十四、打ちながらうくる心の起るのは



これぞ恐るゝはじめなりけり

八十五、すきもなく無暗やたらに打ちたちは

心亂れと省りみるべし

八十六、お突にて勝たんと思ふ氣のするは

わが身からだの利かぬためなり

八十七、小手へ来る太刀をはづして友から

もろ手で逆に喉をつくわざ

八十八、太刀先をむやみやたらに振る人は

後のちには打ちを調子にて出す

八十九、打ちまよひする太刀くせのあるときは

おのが心の定まらぬから

九十、上段にとられし時は身を捨てゝ

敵の心のとゝのはぬさき

九十一、上段は立派なれども不利なれば

むやみやたらに取るものでなし

九十二、兩刀に立ち合ふ時と上段は

おなじ構と同じ心に

九十三、兩刀に立ち向ひたる其時は

小太刀に心うつすべからず

九十四、居ながらに胸を打つのは早けれど

多くは平になりやすきもの

九十五、拔面は打たるゝものと覺悟して

打たれてもゆけうたれてもゆけ

九十六、さし面は斬れるものではなけれども



手のくつろぎをならふ爲なり

九十七、片手にて受け始めたら止まりて

それより業の進むことなし

九十八、摺上げて面を打つのは至極なり

すり落しから突も亦妙

九十九、面へ来る太刀をかすみに受け流し

體を開きて右でわり面

百、立合はぬ先に勝てると思ふのは

目より技のすゝむゆるなり

百一、押へたる太刀にねばりのなき時は

敵の手元のくつろげるなり

百二、取立では上手の者を打つよりも

打たれ上手になるがむづかし

百三、明月をおほへる雲の知らぬ間に

遠く消えゆくありさまにして

百四、あやまちて敗れを取りし仕合には

勝つわざよりも忘るべからず

百五、此道は上手ばかりが師ではなし

下手ありてまた上手ともなる

百六、限りある身體なれど限りなく

つかへるものと心はげみて

百七、無二無三萬法師一おもひいり

外に心のなか移らん

百八、風吹けどうごかぬ峯の心せよ



いたれば山の位なりけり

百九、世の中の人のかたきは外になし

おもふ我身はわがかたきなり

百十、數々の業は多しといふとても

もと一體のものとするべし

百十一、勝つとても身より心をしばり繩

とけざる内は下手ところ知れ

百十二、生死いきしにをのがれはてすば武士の

道もかならず誤るとしれ

百十三、其道のその理ことばはおのづから

業をはなれて業にこそあれ

百十四、敷島の海を渡らすすぐにゆけ

入江の小島身をよせずして

百十五、太刀は我邪氣を拂ふの采配と

たゞ一すちに思ひいるべし

百十六、わけ登る麓の道は多けれど

同じ高根の月をこそ見れ

百十七、武士の矢橋の舟は速くとも

急がば廻れ瀬田の長橋

百十八、雲はれて後の光と思ふなよ

もとより空に有明の月

百十九、心こそ心まとはす心なれ

心に心心ゆるすな

百二十、月影の照さぬ里はなけれども



ながむる人の心にぞ澄む

百二十一、浮草をはらひて見れば底の月

こゝにありとはたれか知るらん

百二十二、強きより弱きを己が力にて

風にはおれぬ青柳の糸

百二十三、神とても形は人も同じ事

たゞ心こそ神といはれる

百二十四、形なき神の宮居を恐るゝも

わがよこしまの心なりけり

百二十五、人の身の直に生れし形をも

わが心よりゆがまするなり

百二十六、力とは手足體の事でなく

只一心のうちにこそあれ

百二十七、勝負とは先づ勝事をやめにして

負けじと思ふ心こそよき

百二十八、六藝はわがたしなみに習ひしを

名をひろめんと思ふつたなき

百二十九、鐵石の角あるなかもいつしかに

すり磨きては玉となるべし

百三十、負けてすむ處を負よへり下れ

千に負けつゝ一人にかて

第五節 愛國百人一首

愛國の情熱を歌つたもの百首、大東亞戦争最中に選定されたもので、愛國精神昂



揚と共に武道と相通する所あり、朗誦の一資料とすべき良き材料である。

○皇は神にしませば天雲の雷の上に廬せるかも 柿本人麿

○大宮の内まで聞ゆ網引すと網子ととのふる海人の呼び聲 長 奥 麿

○やすみししわが大王の食國は大和も此處も同じとぞ念ふ 大伴旅人

○千萬の軍なりとも言擧せず取りて來ぬべき男とぞ念ふ 高橋蟲麻呂

○土やも空しかるべき萬代に語り繼ぐべき名は立てずして 山上憶良

○旅人の宿りせむ野に霜降らば吾が子羽ぐくめ天の鶴群 遣唐使人母

○丈夫の弓上振り起し射つる矢を後見む人は語り繼ぐかね 笠 金 村

○御民吾生ける驗あり天土の榮ゆる時に遇へらく念へば 海大養岡麻呂

○大君の命恐み大船の行きのまにまにやどりするかも 雪 宅 麿

○あおによし寧樂の京師は咲く花の薫ふがごとく今さかりなり 小 野 老

○あしびきの山にも野にも御獵人得物矢手挟み散動りたり見ゆ 山部 赤 人

○わが背子はものな思ほし事しあらば火にも水にも吾なけなくに 安倍 女郎

○新たしき年のはじめに豊の年しるすとならし雪の降れるは 葛 井 諸 會

○唐國に往き足らはして歸り來む丈夫武雄に御酒たてまつる 多治比 鷹 主

○天の下すでに覆ひて降る雪の光を見れば貴くもあるかな 紀 清 人

○大君の命かしこみ磯に觸り海原渡る父母を置きて 丈部 人 麻 呂

○眞木柱ほめて造れる殿のごといませ母刀自面變りせず 坂田部 首 麻 呂

○霰降り鹿島の神を祈りつつ皇御軍に吾は來にしを 大舍人部 千 文

○今日よりは願みなくて大君のしこの御楯と出で立つ吾は 今奉部 與 曾 布

○天地の神を祈りて幸矢貫き筑紫の島をさして行く吾は 大田部 荒 耳

○ちはやぶる神の御坂に幣奉り齋ふいのちは母父が爲め 神人部 子 忍 男

○降る雪の白髪までに天皇に仕へまつれば貴くもあるか 橋 諸 兄

○天皇の御代榮えむと東なるみちのく山に金花咲く 大伴 家 持



- 翁とてわびやは居らむ草も木も榮ゆる時に出でて舞ひてむ 尾張濱主
- 海ならずたゝへる水の底までも清き心は月ぞ照さむ 菅原道實
- 山のごと坂田の稻を抜き積みて君が千歳の初穂にぞ春く 大中臣輔親
- もろこしも天の下にぞ有と聞く照る日の本を忘れざらなむ 成尋阿闍梨母
- 君が代はつきじとぞ思ふ神かぜやみもすそ川のすまん限は 源 經 信
- 君が代は松の上葉におくつゆのつもりて四方の海となるまで 源 俊 頼
- 君が代にあへるは誰も嬉しきを花は色にもいでにけるかな 藤原範兼
- みやま木のその梢とも見えざりし櫻は花にあらはれにけり 源 頼 政
- 宮柱したつ岩根にしき立ててつゆも曇らぬ日の御影かな 西 行
- 君が代は千代ともささじ天の戸やいづる月日のかぎりなければ 藤原俊成
- 昔たれかかる櫻の花を植ゑて吉野を春の山となしけむ 藤原良經
- 山はさけ海はあせなむ世なりとも君にふた心わがあらめやも 源 實 朝

- 曇りなきみどりの空を仰ぎても君が八千代をまづ祈るかな 藤原定家
- 末の世の末の末まで我國はよろづの國にすぐれたる國 宏覺禪師
- 西の海よせくる波も心せよ神の守れるやまと島根ぞ 中臣祐春
- 勅として祈るしるしの神風に寄せくる浪はかつ砕けつつ 藤原爲氏
- 思ひかね入りにし山を立ち出でて迷ふうき世もたゞ君の爲 藤原師賢
- もののふの上矢のかぶら一筋に思ふ心は神ぞ知るらむ 菊池武時
- 命をば軽きになして武士の道よりおもき道あらめやは 源 致 雄
- 限なき恵みを四方にしき島や大和島根は今さかりなり 藤原爲定
- かへらじとかねて思へば梓弓なき數に入る名をぞとどむる 楠 正 行
- 鶏の音になほぞおどろくつかふとて心のたゆむひまはなけれど 北畠親房
- 君をいのるみちにこそげば神垣にはや時つけて鶏も鳴くなり 津守國貴
- いのちより名こそ惜しけれもののふの道にかふべき道しなければ 森迫親正



- あふぎ來てもろこし人も住みつくやげに日の本の光なるらむ 藤原實隆
- あぢきなやもろこしまでもおくれじと思ひしことは昔なりけり 新納忠元
- 富士の嶺に登りて見れば天地はまだいくほどもわかれざりけり 下河邊長流
- 行く河の清き流れにおのづから心の水のかよひてぞすむ 徳川光圀
- ふみわけよ大和にはあらぬ唐鳥の跡をみるのみ人の道かは 荷田春滿
- 大御田のみなわも泥もかきなれてとるや早苗は我が君の爲 賀茂真淵
- もののふの兜に立つる鍬形のながめしはは見れどあかぬかも 田安宗武
- すめ神の天降りましける日向なる高千穂の嶽やまづ霞むらむ 楫取魚彦
- 天の原てる日にちかき富士の嶺に今も神代の雪は残り 橋枝直
- 千代へぬる書もしるさす海つ國の守りの道は我ひとり見き 林子平
- われをわれとしろしめすかやすめらぎの玉のみ聲のかゝるうれしさ

高山彦九郎

- あし原やこの國ぶりの言の葉に榮ゆる御代の聲ぞ聞ゆる 小澤廬庵
- しきしまのやまと心を人とはば朝日ににほふ山ざくら花 本居宣長
- 初春の初日かゝよふ神國を神のみかげをあふげもろもろ 荒木田久老
- 八東穂の瑞穂の上に千五百秋國の秀見せて照れる月かも 橋千蔭
- かぐ山の尾の上に立ちて見渡せば大和國原早苗とるなり 上田秋成
- かけまくもあやに畏きすめらぎの神のみ民とあるが楽しさ 栗田士滿
- 遠つ祖の身によるひたる緋緘の面影浮ぶ木々のもみぢ葉 蒲生君平
- 大日本神代ゆかけてつたへつる雄々しき道ぞたゆみあらすな 賀茂季鷹
- 青海原潮の八百重の八十國につぎてひろめよこの正道を 平田篤胤
- ひとかたに靡きそろひて花すすき風吹く時ぞみだれざりける 香川景樹
- かきくらす亞米利加人に天つ日のかゝやく國のてぶり見せばや 藤田東湖
- わが國はいともたふとし天地の神の祭をまつりごとにて 足代弘訓



○君がため花と散りにしますらをに見せばやと思ふ御代の春かな 加納 諸平

○大君のためには何か惜しからむ薩摩の瀬戸に身は沈むとも 月 照

○大君の宮敷きましゝ檀原のうねびの山の古おもほゆ 鹿持 雅澄

○君が代を思ふ心のひとすぢに吾が身ありとはおもはざりけり 梅田 雲漢

○大君の御贄のまけと魚すらも神代よりこそつかへきにけれ 石川 依平

○身はたとひ武藏の野邊に朽ちぬともとゞめおかまし大和魂 吉田 松陰

○岩が根も砕かざらめやもののふの國の爲にと思ひ切る太刀 有村 治左衛門

○あまざかる蝦夷をわが住む家としてならぶ千島のまもりともがな

徳川 齊昭

○天皇に仕へまつれと我を生みし我がたらちねそたふとかりける 佐久良 東雄

○鹿島なる經津のみ靈のみ劍をこころに磨きて行くはこの旅 高橋 多一郎

○やすみししわが大君のしきしませる御國ゆたかに春は來にけり 大倉 鷲夫

○朝廷邊に死すべきいのちながらへて歸る旅路の憤ろしも 有馬 新七

○君がため命死にきと世の人に語り繼ぎてよ峰の松風 松本 奎堂

○天皇の御楯となりて死なむ身の心は常に楽しくありけり 鈴木 重胤

○曇りなき月を見るに思ふかな明日はかばねの上に照るか 吉村 虎太郎

○しづたまき數ならぬ身も時をまちて君がみ爲めにならむとぞ思ふ 兒玉 草臣

○青雲のむかふすきはみすめぎみのみいづかゞやく御代になしてむ 平野 國臣

○ますらをが思ひこめにし一筋は七代かふとも何たわむべき 澁谷 伊與作

○大君の御楯となりて捨つる身と思へば輕きわが命かな 津田 愛之助

○みちのくのそとなる蝦夷のそとを漕ぐ舟より遠くものをこそ思へ

佐久間 象山



- 執り佩ける太刀の光はもののふの常にみれどもいやめづらくも 久坂玄瑞
- 君が代はいはほと共に動かねばくだけでかへれ沖つしら浪 伴林光平
- 大山の峰の岩根に埋めけりわが年月の大和だましひ 眞木和泉
- 武夫のたけき鏡と天の原あふぎ尊め丈夫のとも 平賀元義
- 片敷きて寝る鏡の袖の上に思ひぞつもる越の白雪 武田耕雲齋
- 大君の御旗の下に死してこそ人と生れし甲斐はありけれ 田中河内介
- ものゝふのやまと心をより合せただいとすちの大綱にせよ 野村望東尼
- 後れても後れてもまた君たちに誓ひしことをわれ忘れめや 高杉晋作
- 春にあけてまづ讀む書も天地のはじめの時とよみ出づるかな 橘曙覧
- 男山今日の行幸の長きも命あればぞをろがみにける 大隈言道

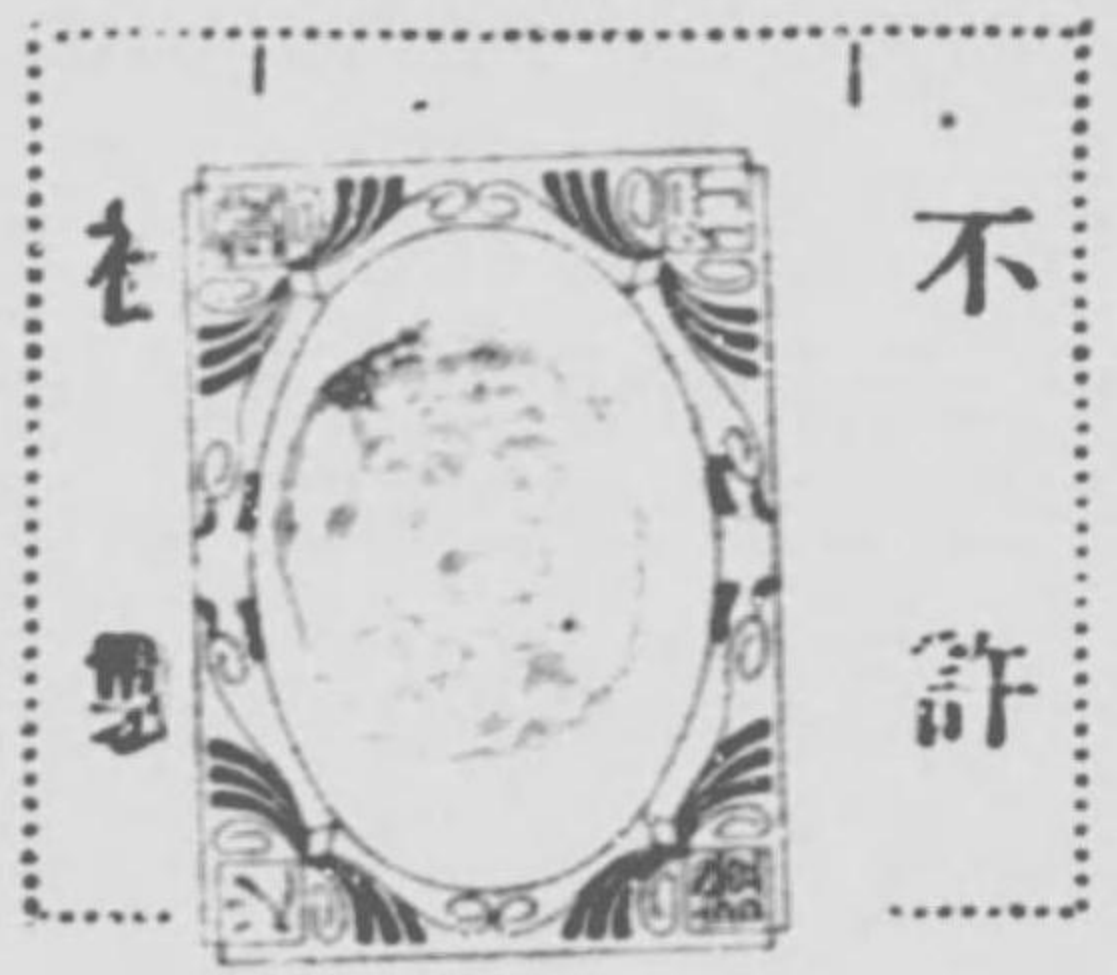
國民學校劍道教授の研究 (終)

昭和十八年六月一日 初版印刷  
 昭和十八年六月五日 初版發行  
 一、〇〇〇部

國民學校 劍道教授の研究  
 定價 貳圓拾錢  
 特別行爲 拾錢  
 稅相當額  
 合計 貳圓貳拾錢

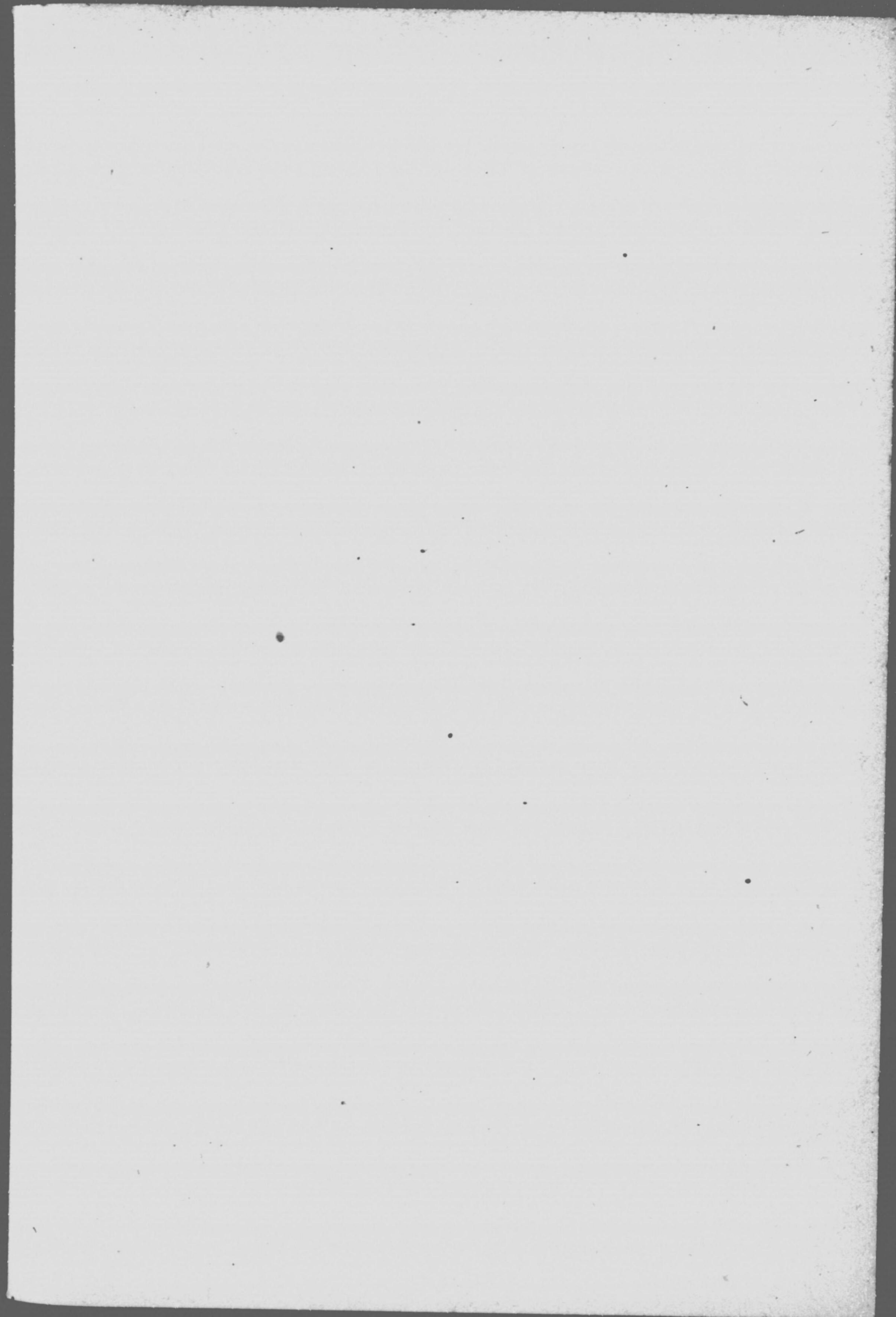
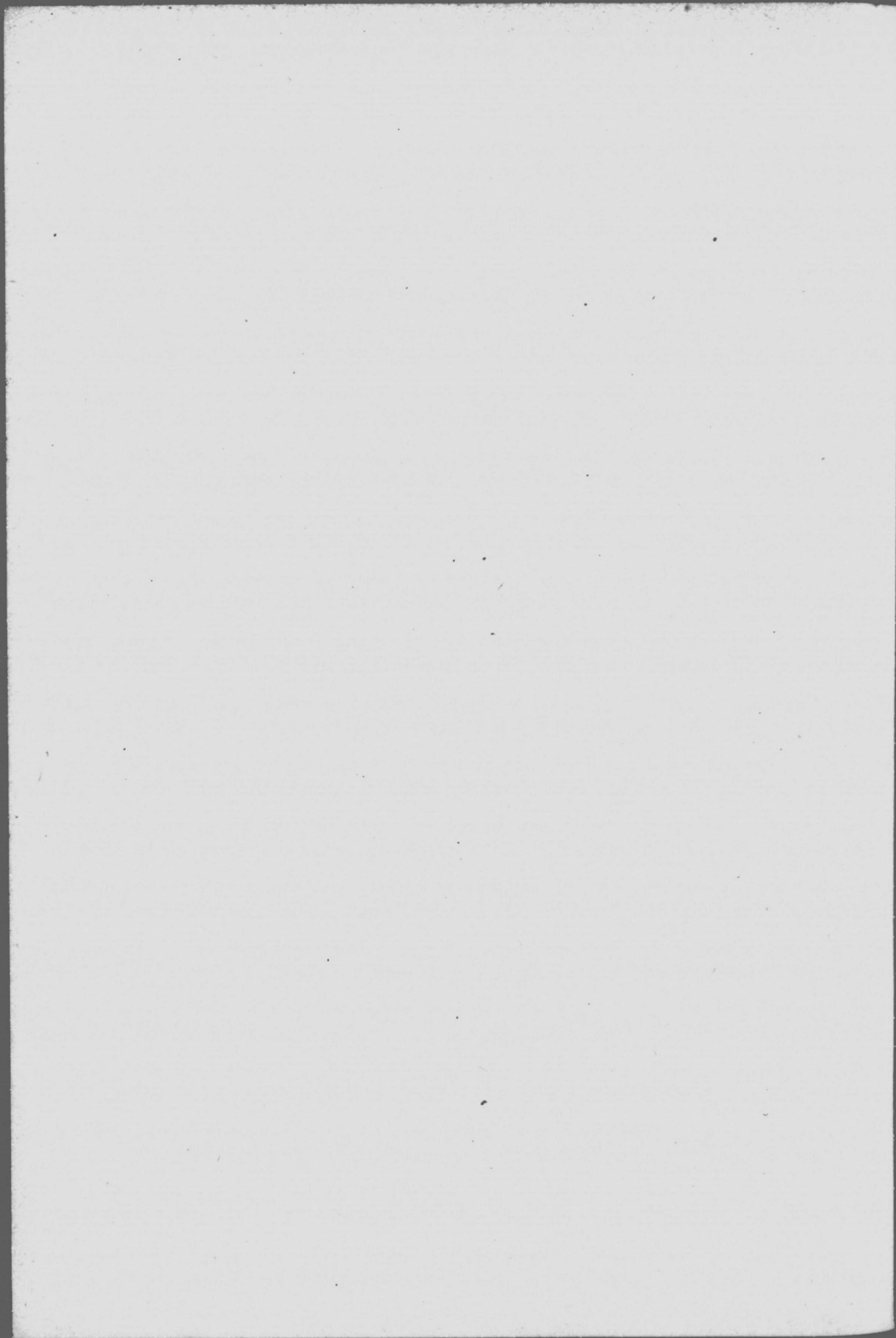
著者 馬場豊二  
 東京市京橋區入船町三丁目三番地  
 發行者 藤原惣太郎  
 東京市京橋區入船町三丁目一九番地  
 印刷者 原要五郎  
 東京二五〇

日本出版文化協會發行承認番號 ア430575



發行所 東京市京橋區入船町三丁目三番地  
 明治圖書株式會社  
 日本出版配給株式會社  
 配給元 東京市神田區淡路町二丁目九番地







276
850



0